までどおり知人と交流をしたり，よく行くお店を訪問したりということが可能となり，生活の継続性が獲得され，残存能力も活用しやすくなる．よって，生活圏内に転居先（地域密着型特定施設，地域密着型介護老人福祉施設）があると好ましいのである．一方で，自宅にて受けるサービスは，なぜ小圏域内にあったほうがよいのであろうか．事業者は，近い家であればこまめに何度でも訪問できるが，片道1時間もかかるようなところでは，1日に何度も訪問できない．圏域が大きい場合は移動時間を避けて訪問回数を減らそうとするため，利用者の頻繁な訪問ニーズに応えづらいということになる．加えて，少人数で小さな地区内であれば，ケアパーソンは地理的条件も住民の様子も把握しやすい．少人数小圏域を担当するほうが，きめ細かいサービスとなりやすいし，地域コミュニティの中で利用者との親密なサポート関係が構築されやすいと考えられるのである．

④ 小規模分散化の事例1―こぶし園

サービス施設を小規模かつ小圏域に設置し，分散して運用している事例として，新潟県長岡市のこぶし園が挙げられる．「コンビニエンスサービス」と自称し，居住者にとって，身近な生活エリアの中に多様なサービスがそろっている状況を積極的に生み出している（図10-13）．10 km 程度の距離のうちに，20箇所のサポートセンターやデイサービスセンターを運営している．運営者によれば，24時間365日のコンビニエンスサービスによって，地域の高齢者ができるかぎり自宅にて過ごすことを支え

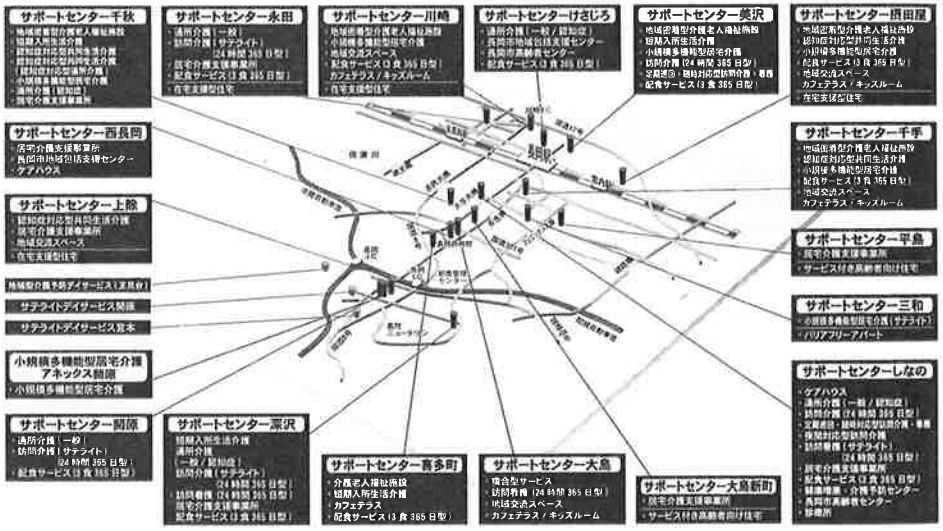

図10-13　新潟県長岡市におけるサポートセンターの分散配置[6]

ることができる．また，自宅で過ごせない人のためには，地域内の既存建物の再利用などで居住空間を提供する．施設として求められるのが小規模な建物のため，1軒の住宅からさまざまな建物まで再利用に合ったストックが見つかりやすい．100人超の巨大な施設を建設するのに比べて，初期建設コストを抑制できるとのことである．

一つひとつのサポートセンターは，たとえば小規模多機能＋地域密着型介護老人福祉施設＋配食サービスといった構成である．サポートセンター美沢（図10-14，10-15）は地域密着型介護老人福祉施設，20 m^2 の個室で2ユニット，定員15名の小規模な居住施設で，それに小規模多機能（定員25名）と訪問介護と配食サービスが一緒となっている．居住者は2～4 km の圏域設定となっているとのことである．

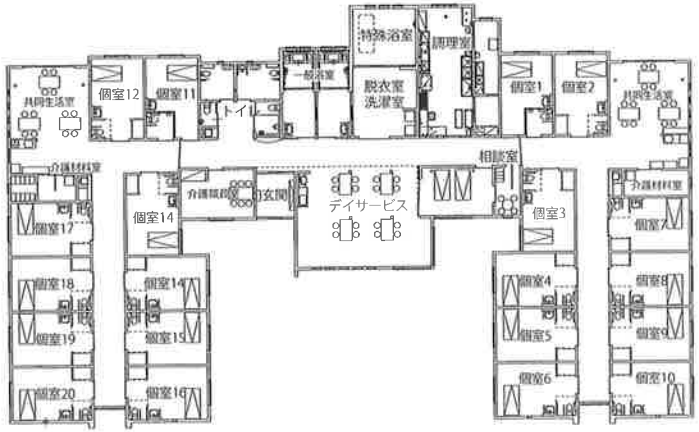

図10-14　サポートセンター美沢の平面図[6]

図10-15　サポートセンター美沢の外観

⑤ 小規模分散化の事例2 ― アザレアン大畑

長野県上田市のアザレアンさなだの大畑の家も，地域密着型介護老人福祉施設（8名）と，ショートステイ（4名），小規模多機能（18名）を併設したサテライトである（図